

ひろば 令和4年度 総合教育センターの取り組み

研修調査室の重点

令和3年度の教職員研修は、令和2年度に引き続きコロナ禍の中での実施となり、研修の変更や中止を余儀なくされました。

令和2年度から、集合研修にかわるオンラインによる研修について模索し、先進的に取り組む学校や大学等に視察等をする中で、グーグルやズームを活用した同期型（同時双方向）及び非同期型（オンデマンド）のオンライン研修を実施できるように、準備を進めてきました。それにより、令和3年度は、市総合教育センターとして、初めてオンライン研修を実施することとなりました。オンライン研修を実施する中で、その良さや課題も明らかになりました。また、集合研修の良さについても改めて確認することができました。

この2年間の経験を踏まえ、令和4年度については、次の点に重点を置いて研修を進めて参ります。

1 初任者研修の研修内容の精選

近年、本市では多くの新採用教職員が配置されており、各学校における初任者研修の負担も増しています。県教育委員会では、令和3年度から校内研修を120時間に削減しました。

これを踏まえて本市でも、令和4年度から校内研修を120時間で実施します。

2 授業改善に向けた研修の充実

「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善、I C T機器を効果的に活用した授業改善がさらに進められるよう、基本研修の授業研修及び専門研修の教科研修を中心に、研修の充実を図ります。

3 専門研修の充実

専門研修では、学校が抱える課題等の改善に寄与するため、県内外の大学や研修機関及び先進校から講師を招き、研修の充実を図ります。また、I C T機器の活用力を高めるための講座を拡充します。

4 調査研究委員会 第8期の活動

令和4年度から第8期として小・中学校の先生方に委嘱し、新たなテーマを設定して2年間の実践研究を開始します。

教育支援室の重点

教育支援室が設置され5年が経過しようとしています。その間、指導主事の増員などにより、教育相談、不登校対策、家庭支援、特別支援教育の4つの業務の充実が図られてきました。特に今年度の重点として①地域資源を生かした学校支援、②初めて特別支援学級等を担当する教員支援、③心理検査を生かした児童生徒支援の充実に取り組んできました。コロナ禍による社会経済情勢の変化による相談や支援内容の多様化、深刻化を踏まえ、来年度の重点を次の3点としました。

1 地域資源のつながりを生かした支援の充実

今年度は地域資源を生かすことができるようにするため、指導主事の関係機関訪問やいわき基幹相談支援センターとの定期的な打合せを実施し、関係機関との情報の共有を行ってきました。来年度、定期的な打合せの他、随時、必要に応じた打合せ等を実施し、学校支援や相談支援に積極的に生かしていきたいと考えています。

2 特別支援学級等担当教員への支援の充実

特別支援学級在籍児童生徒数と特別支援学級数は、来年度も更に増加が見込まれています。これは、特別支援学級への理解の深まりと同時に期待の高まりであると捉えられます。特別支援学級等担当教員への支援については、管理職や特別支援学校、関係機関と力を合わせて取り組み、充実を図っていききたいと考えています。

3 教員の相談スキルの向上と学校の相談体制構築の支援の充実

今年度は心理検査を生かした児童生徒支援の充実のため、学校と連携を図ってきました。しかし、検査結果を生かして学校が児童生徒、保護者との継続的な相談や支援に至っていないと感じることもあります。児童生徒、保護者に最も近い立場にある学校が継続的で、丁寧な相談を行うことにより、児童生徒、保護者とのよりよい関係づくりと切れ目のない支援、よりよい成長につながります。来年度はそのための学校支援の充実を図っていききたいと考えています。

いしずえ
いわき市教育委員会

研修だより

研修だより 第22号
令和4年3月7日

発行所
いわき市教育委員会
発行責任者
教育長 水野 達雄



学びを止めないために

いわき市総合教育センター

所 長 小 玉 則 子

「対話が生まれるような教師の言葉かけを意識した授業を」「わからない、と言えるようにしてあげることが重要だ」「子どもたちの考えをつないだり、間違いを生かしたりする授業の組み立てを」「実際に授業を参観し、それについて協議できる機会はとても有意義」「校内研修の場で伝えたい」

これらは、筑波大学附属小・中学校の先生方を招いて実施した「授業力向上講座Ⅲ（飛び込み授業）」において、研修者から寄せられた感想の一部です。この他、子どもたちが自由闊達に自分の思いや考えを発信したり、共有したりできる土壌がつくられていることへの賞賛の声も聞かれ、校長先生方をはじめ、担任の先生方による日頃からの素晴らしい教育実践に敬意を表するとともに、本講座へのご理解とご協力に、改めて心より感謝申し上げます。

さて、今年度は、まん延防止等重点措置期間が設けられ、さらには次々と新型コロナウイルスの変異株が現れるなど、各校におかれましては、常に感染症対策を講じながら、子どもたちの学びの保障や心のケア等にどう取り組むか、これまで以上に大変な状況にあったかと思います。

集合研修を基本とする本センターの教員研修におきましては、各校での紙上研修にご協力をいただきながら、基本研修や職能研修、免許状更新講習など、先生方に不利益が生じないように、どう研修を進めていくか、さらには、小学校に続き、今年度からは中学校においても学習指導要領が全面实施となったことから、委嘱調査研究委員が2年をかけて取組んできた「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善への取り組みを、教育研究発表会等を通じて市内の先生方へいかに発信

していくかなど、解決すべき問いは学校と同じでした。

そして、これまでの当たり前を当たり前とせず「目的」は何であるかを明確にし、内容のスリム化と選別化、I C T環境を活用した効率化と個別化等を図り対応してまいりました。人数の制限や中止せざるを得なかった研修、I C Tが故の不具合や限界、初任者研修の充実等、課題は少なくありませんでしたが、正に、問いに対する答えも学校におけるそれと同じであったように思います。

「Society5.0時代や予測困難な時代をこれから子どもたちは生きる」と言われますが、それは同時に、長短はあるにせよ、我々教師も、そのような時代に教師として生き、子どもたちの学びを支えていくということを意味します。今更ではありませんが、主体的な学びとは学びの当事者になることであり、対話的な学びとは多様な考え方をもちつ者同志が、対話を通して合意形成等を図っていくプロセスです。そして、そこからさらに理解を深め、課題を解決し、新たな学びへとつなげていくことが深い学びであると考えます。冒頭の感想にあるように、先生方自身が学びの当事者となり、共に学び合い、子どもたちに、どのように学ばせるかを体感し、授業の改善につなげていくことが、急激に変化する時代の中で教師として求められる姿と言えるのではないのでしょうか。

この1年、研修においては大変ご負担をお掛けいたしました。高みを目指す先生方の意欲や期待に、いかなる時も応えていくという、本センターの目途に改めて思いを強くするとともに、今年度の成果と課題を踏まえ、先生方の学びを止めないための総合教育センターであるよう、今後も一層努力してまいります。

令和 2 ・ 3 年度 調査研究委員会 実践研究報告

調 査 研 究 委 員 会 実 践 研 究 の 概 要

令和 2 ・ 3 年度調査研究委員会（第 7 期）は市内小・中学校の先生方 20 名によって構成され、教科部会と教科外部会に分かれて実践研究を行ってきました。

＜教科部会での実践研究＞

教科部会は、国語、社会、算数・数学、理科、外国語の 5 つの部会で構成され、授業における実践を柱に研究を進めてきました。

実践研究の重点課題を「資質・能力を育成するための『主体的・対話的で深い学び』の視点による授業改善の推進～単元構想の工夫を通して～」とし、単元を通して育む資質・能力を明確にし、それらを育成するための「主体的・対話的で深い学び」の授業を単元のまとまりの中で構想し、実践してきました。この 2 年間で、小・中学校合わせて 23 の実践授業を行うとともに、「単元構想シート」を作成することができました。

＜教科外部会での実践研究＞

教科外部会は、道徳、生徒指導、特別支援教育

の 3 つの部会で構成され、道徳部会においては、「考える道徳」「議論する道徳」の在り方について実践研究を進め、生徒指導と特別支援教育部会では、「効果的なケース会議の進め方」に関して実践研究を行ってきました。

その結果、道徳部会では 4 つの授業案を、生徒指導部会と特別支援教育部会では、実際に行ったケース会議をもとに、小・中学校ごとにケース会議のモデルを提案することができました。

何よりの成果は、コロナ禍の影響で日々の教育活動が制限されたり、学校行事の度重なる変更を余儀なくされたりする中にもかかわらず、調査研究委員の先生方が意欲的に実践研究に取り組んでくださったことです。

これらの先生方の実践研究については、授業動画及び実践資料（学習指導案、単元構想シート、2 年間のまとめ）を市総合教育センターの F C S ポータル及び K ドライブにアップロードしてありますので、是非、ご活用ください。

2 年間の実践研究を振り返って 調査研究委員会委員長 角田 健司

調査研究委員会では、令和 2 年度・令和 3 年度の 2 年間にわたり、「いわき市立小学校及び中学校における児童生徒に対する教育の推進を図るための調査研究を行う」という目的のもと、教科等研究部門における授業実践並びに生徒指導及び特別支援教育研究部門における事例研究を通して実証的研究を行ってきました。

この 2 年間を振り返ると、コロナ禍の影響により様々な制限がかかりました。また、昨年度は長期の休校もあり授業の進捗にも大きな影響が出ました。そのような中での実践研究は、なかなか厳しいものがあったのではないかと思います。それでも、各教科部会では、「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善、各教科特有の「見方・考え方」を活用した深い学びの実現に向けて、視点を明確にして実践を進めてきました。また、教科外部会では、本市の現状を踏まえた適切な課題を設定し、課題解決のための研究を進めてきました。

研究 1 年目の成果と課題を発表する令和 2 年度

教育研究発表会は、いわき市内でも新型コロナウイルスがまん延し、リハーサルも終え本番を待つばかりとなっていたのですが、中止となってしまいました。非常に残念でしたが、そこから、1 年目の課題をもとに 2 年目の実践を進めてきました。年 4 回の全体研修会に加え、各部で計画した自主研修会、実践映像収集のための授業実践のビデオ撮影にご協力いただいた学校もありました。研究委員が中心となり、総合教育センター指導主事の皆様、各校校長先生方のご理解とご協力により、この 2 年間の研究が完結を迎えることができましたことに感謝申し上げます。

各学校では、それぞれに教育課題をもち、その課題解決のために様々な取り組みを行っています。学校を運営する校長はもちろんですが、現場で悩みを抱え課題解決のために悪戦苦闘している先生方も多くいると思います。いわき市の教員の代表として選ばれた研究委員の先生方の 2 年間の実践研究が、悩みを抱える先生方の光となることを期待して止みません。

令和 3 年度 いわき市総合教育センター教育研究発表会から

＜第 1 部 分科会について＞

調査研究委員会 副委員長 甲高 乾

教科部会および教科外部会の全 8 分科会が総合教育センターをはじめとした 2 施設の各会場に分かれ、2 年間におよぶ調査研究の成果を発表しました。

教科部会は、「資質・能力を育成するための『主体的・対話的で深い学び』の視点による授業改善の推進～単元構想の工夫を通して～」を重点課題とし、授業実践を通して各教科特有の「見方・考え方」を活用した「深い学び」の具現化を図り、その取組みを発表しました。

また、教科外部会は、課題解決に向けた組織的な指導・支援や「考え、議論する道徳」の具現化に向けた取組みを発表しました。

どの会場でも参会の皆様がメモをとりながら傾聴する姿や熱心に質疑する姿が見られ、それは、市内小・中学校における授業改善の萌芽であると感じました。

令和 3 年度 いわき市総合教育センター事業報告

＜研修調査室から＞

本センターでは、教員のライフステージに応じたキャリアアップと教育現場の課題解決に生かせるような研修・講座を企画し、実施しています。

令和 3 年度は 154 の研修・講座を開設し、延人数として合計 4,239 名もの先生方が参加されました。この他、学校司書や A L T、支援員の研修も実施しております。

今後も教育現場での実践につながるように、更なる研修の充実を図って参ります。

今年度の研修参加者数は次のとおりです。

＜令和 3 年度 延受講者数＞（2 月末現在）

○基本研修	926 名
・連絡協議会等	282 名
○職能研修Ⅰ	809 名
○職能研修Ⅱ	665 名
○専門研修	1,112 名
※教員免許状更新講習	（内 251 名）
○研究発表会	169 名
○その他の研修	276 名

＜第 2 部 全体会について＞

第 2 部全体会では北鎌倉女子学園長の柳沢幸雄先生から、「これからの学校教育・教師に求められること」と題して、ご講演いただきました。

子どもたちが、国際化が進む社会を生き抜いていくために必要な「自己肯定感」や「自信」を、どのように育んでいくのか。柳沢先生には「垂直比較でほめる」「脳動学習の実践」など多くの示唆をいただきました。

「垂直比較」とは、他者との比較ではなく、子ども自身がどのように変化したのかを見取り、ほめることです。「以前はここまでできたが、今はここまでできるようになった」という見方です。

「脳動学習の実践」とは、受け身ではなく、脳が汗をかくような学習を実践することです。ただ授業を聞くスタイルではなく、自ら考え、行動できるような場を与えていくことが必要です。

「自分はチャレンジすればできるはず！」と自分を信じて学ぶ子どもたちを、学校教育の中で育てていくことが喫緊の課題です。

＜教育支援室から＞

今年度の市特別支援審議会件数は 78 件、教育相談件数は 128 件（12 月末現在）増加しています。

内容も年々多様化・深刻化し、これらに対応すべく、さらに支援の充実を図って参ります。

＜令和 3 年度 主な事業＞（12 月末現在）

○教育相談に関すること

- ・学校支援 111 件（内サポート訪問 7 件）
- ・教育相談 1,268 件（内就学相談 74 件）

○特別支援教育に関すること

- ・教育支援審議会、特別支援委員会（6 回）
- ・基幹相談連携会議（4 回）
- ・教育相談いわきネットワーク会議（2 回）

○教職員の研修・講義に関すること

- ・不登校対策会議、支援員研修（延 297 名）
- ・特別支援教育人材育成プログラム会議
- ・特別支援関係研修（延 434 名）
- ・講義及び指導助言派遣等（12 件）

○子どもや保護者の支援に関すること

- ・チャレンジホーム合同行事（6 回）

生徒指導部会（平二小：田中 徹、小川中：吉田 裕）

1 研究方針

いじめや不登校など、学校が抱える諸課題に対応するためには、チーム支援が重要となる。

本部会では本市の喫緊の課題である不登校に焦点を絞り、チーム支援を行うために不可欠な「ケース会議の在り方」について研究に取り組んできた。しかし、学校現場では「時間がとれない」などの要因から実施に至らないことがあると思われた。そこで、負担を減らし、児童生徒に寄り添ったチーム支援を行うための「効果的なケース会議の在り方」を探ることとした。

2 研究内容

(1) 1年次

市総合教育センターで提案しているケース会議を実施し、良い点や改善点をまとめる。

(2) 2年次

不登校児童生徒に対応したケース会議の在り方（進め方、実施上の留意点）について、さらに各校で実践を重ね、より効果的なケース会議の在り方を検証する。

3 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 担任だけが抱え込むのではなく、チームで対応しているという意識が芽生え、精神的な負担軽減となった。
- 「実施上の留意点」を共有することで、安心感のある会議となった。特に、「批判しない」の共有により、先生方が安心して会議に参加することができた。
- 短時間の実施により、負担を軽減できた。
- ホワイトボードに意見を記録し可視化することで、発言の重なりが減り、スムーズに会議が進んだ。
- これまでの経緯や支援を振り返る時間になり、支援方法の整理にもつながった。
- 児童生徒の願いや思いに寄り添えた。
- コーディネーター役の力量が必要である。（進め方、時間配分等）
- 慎重に支援策を検討するケースや緊急対応が求められるケース等については、さらに研究していく必要がある。

国語部会（中央台東小：折内 弘子、植田中：花塚 寛、平三中：吉川 幸枝）

1 授業改善の視点

国語科では、主体的・対話的で深い学びを実現させるために、「言葉による見方・考え方を働かせた国語科における深い学びとは」という研修主題を設定した。意図的・計画的な学習の構想のための「単元構想シート」を作成し、次のような3つの視点のもとに、授業実践に取り組んできた。

2 実践内容

- ① 知識を相互に関連づけてより深く理解する
- ② 情報を精査して考えを形成する
- ③ 仲間との関わりの中で伝え合う力を高める

3 成果と課題（成果：○ 課題：●）

- 単元構想シートをもとに、単元や題材などのまとまりの中での指導事項を明確にした指導を実践することができた。
- 既習事項を活用して授業を展開したことで児童生徒の言葉への意識を高められた。
- 具体と抽象の関係に焦点化した指導を行ったことで、論理の展開を明確に把握すること

ができた。

- 思考ツール、G I G A端末の利用等を通して論理の可視化を図ったことで、考える力を高める授業の提案ができた。
- I C Tを活用することで、一人一人の学びを累積し、互いの学びを共有させることができた。また、共有化により互いの学びを深めさせることもできた。
- 小グループでの話し合い活動を行ったことで、自分の考えをもつ方法（観点を明確にする、発想を否定しない等）を児童生徒自身で見つけることができた。
- 小学校、中学校の国語科における学びの課題意識を共有し、学びの接続の意識化を図った授業を実践できた。
- 実践の量的分析（エビデンス）と検証の方法を明確に提示できるようにする。
- 授業終末での振り返りや話し合い活動について更なる工夫が必要である。

特別支援教育部会（植田小：梅原 陽子、中央台北中：塩 めぐみ）

1 研究方針

小・中学校の通常の学級に在籍する発達障がいのある児童生徒の増加に対し、より良い対応を図るため、「児童生徒の困りに寄り添うチーム支援を行うためのケース会議の在り方について」をテーマとして研究を行った。

2 研究内容

市総合教育センターが提案するケース会議（図1）を実践し、特別な教育的支援を必要とする児童生徒に対応したケース会議の在り方と校内の情報共有についてまとめた。

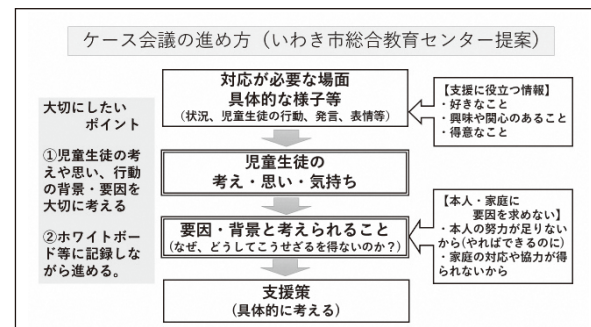


図1 ケース会議の進め方と大切なポイント

支援の整理には、①障害の状態等、②特別な指導内容、③教育上の合理的配慮を含む支援内容の3観点を踏まえることが大切である。（「障害のある子供の教育支援の手引」より）

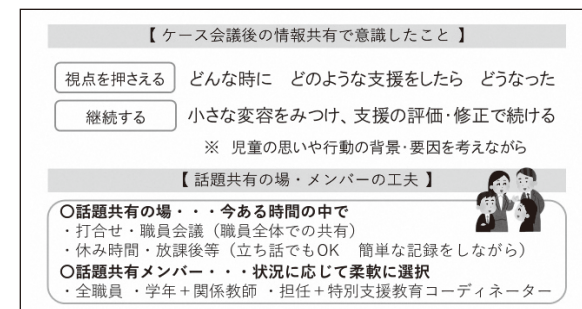


図2 ケース会議後の情報共有

3 成果と課題

- 児童生徒の思いや背景、要因を大切にしたケース会議は、困りに寄り添う支援策につながり、視点を押さえて継続することにより、チーム支援が充実した。
- 支援策を中心としたケース会議の実践と、児童生徒の思いや背景に着目する教師の習慣づくりが、今後の課題である。

社会部会（小名浜東小：久野 雄平、小名浜三小：安藤 知広、平三中：志賀 博史）

1 授業改善の視点

1年目は「習得・活用」、2年目は「習得・活用・探究」をテーマにして「主体的・対話的で深い学び」の実践と充実に取り組んだ。特に2年目は、①単元を貫く学習課題の提示、②身につける内容を明確化した習得場面の工夫、③対話や体験をもとにした活用場面の工夫、④新たな課題と向き合う探究の場の設定を研究の柱と位置づけて、研究に取り組んだ。

2 実践内容

小学校では、単元を貫く学習課題を「日本の食料自給率はどれくらいを目指すべきだろう？」に設定して研究を進めた。消費者や生産者など様々な立場から理想の自給率を考え、ミライシードのオクリンクにまとめて友達同士で発表し合うことで学びを深めた。「自分が設定した食料自給率を達成するためにはどうすればいいだろう？」を新たな課題として提示し、これまでの学びを生かして、その方策について探究することで、さらに学びを深めた。

中学校では、単元全体を貫く課題を「政治参加・司法参加の重要性を知る」に設定して研究を進めた。同時期に実施された衆院選を題材にした学習や、自己決定の場を取り入れた裁判員裁判の体験を通して、単元を貫く学習課題に迫る深い学びを実現した。「裁判員辞退率を改善するためにすべきこと」を新たな課題として提示し、これまでの学びを生かして、その方策について探究することで、さらに学びを深めた。

3 成果と課題（成果：○ 課題：●）

- 単元を貫く学習課題を設定したことで、一貫性のある指導が可能となった。
- 対話や体験を通して、知識が実感を伴って身に付き、それを活用して深い学びを展開することができた。
- このような研究を、年間を通して実践するカリキュラム・マネジメントが必要である。
- 授業を更に効果的に行うためのタブレットをはじめとするI C Tの有効活用を検討する。

算数・数学部会（平二小：内山 徹、汐見が丘小：大平 典夫、上遠野中：折笠 久美子）

1 授業改善の視点

- (1) 児童生徒一人一人が数学的な見方・考え方を働かせた深い学びの在り方
- (2) 算数・数学科における思考力・判断力・表現力の育成を目指した単元の構想
- (3) 児童生徒発の「学び」へ向かう授業の構想

2 実践内容

- (1) 小学校第6学年「角柱と円柱の体積」
 - ・ 複合的な立体の体積を「底面積 × 高さ」で求めることのよさを実感できる授業
- (2) 中学校第3学年「関数 $y = ax^2$ 」
 - ・ 自分の考えを伝えたり、他者の考えを聞いたりすることで、学びを深める授業

3 成果と課題（成果：○ 課題：●）

- 単元構想シートの作成によって、単元を見通して育成を目指す資質・能力を明確にすることができた。また、手立てについて考察していくことで、計画的・意図的に資質・能力の育成を図ることができた。
- 児童生徒の「やってみたい」といった課題

の提示や「こんな方法ならできるかも」といった声を拾い上げることで、主体的な学びへとつながった。また、友達との対話を通して、児童生徒一人一人が学びを深めることができた。

- 終末の時間の確保や工夫により、統合的・発展的に問題場面にかかわることができ「深い学び」へつなげることができた。
- 「主体的」「対話的」「深い学び」については、切り離して考えることはできないが、それぞれの視点について手立てを明確にしていく必要がある。
- 教科担任制が始まる小学校では、より専門的な知見が必要になってくる。中学校教員のより専門的な知見を基に、効果的かつ持続性のある小中連携を模索する必要がある。
- GIGAスクール構想により、1人1台の端末が配備された。算数・数学科における効果的なICT機器の活用事例を増やしていくことが必要である。

理科部会（高坂小：志賀 健児、平二中：西 恵美）

1 授業改善の視点

学習指導要領総則における「深い学び」の例に挙げられている項目を基に、次のような授業実践の視点を設定した。

- (1) 1年次
児童生徒が既習の知識や技能を活用し、未知の現象について探究し、解決する内容につなげるための単元構想を工夫すること
- (2) 2年次
1年次の視点に加え、ICTを効果的に活用し、「主体的・対話的で深い学び」につながる実践を工夫すること

2 実践内容

- (1) 小学校における実践
1年次の視点に基づき、5年生の「物のとけ方」で、水に発泡剤を溶かした前後で全体の重さに変化はあるか考える学習を、6年生の「てこのはたらき」で、つり合っている針金の片方をまげると真っ直ぐの方に傾くのはなぜかをつり合いのきまりを使って証明する

学習を行った。2年次の視点に基づき、オクリンクを使って実験結果を共有した。

(2) 中学校における実践

1年次の視点に基づき、1年生の「気体の性質」で、気体に関する既習の知識・技能を活用して未知の気体Xを特定する学習を行った。2年次の視点に基づき、2年生の「血液のはたらき」で、ニワトリの心臓を解剖して観察し、気づいたことや新たな疑問をオクリンクで共有し、考えを深める学習を行った。

3 成果と課題（成果：○ 課題：●）

- 単元構想シートの活用で計画的に知識や技能を習得させ、発展的学習につなげられた。
- 場面や目的に応じたICT活用に可能性を感じた。共有や振り返り等で活用できた。
- 評価する場面、機会の多様化が見られた。
- 年間を通して、児童生徒の深い学びにつながる学習活動を計画する必要がある。
- 児童生徒の情報を収集したり、選択したりする力を段階的に高める必要がある。

外国語部会（錦小：大瀧 美穂、川部中：草野 千春）

1 授業改善の視点

学習指導要領のもと、「主体的・対話的で深い学び」の手立てとして、「場面設定の工夫」を視点とし、さらに単元構想シートを通して、観点別評価をどの場面で、どのように行うのかを吟味しながら、研究を進めた。

2 実践内容

- (1) 小学校6年「Unit5 We all live on the Earth」
既習表現を使って、動物について質問したり答えたりする授業
- (2) 小学校5年「Unit4 He can bake bread well」
He/Sheを理解し、自分の家族ができることについて、友達に伝える授業
- (3) 中学校1年「Unit7 ブラジルから来たサッカーコーチ」
場面に応じて、知らない人について尋ねたり、答えたりする授業
- (4) 中学校2年「Unit5 Universal Design」
身近なもの・ことについて、その使い方などを質問したり、説明するために情報を捉え

て自分の考えを伝え合ったりする授業

3 成果と課題（成果：○ 課題：●）

- 英語を使用する必然性や、主体的にコミュニケーションを図るための場面設定（活動内容を自分ごととして捉えられるような場面）を工夫することで、対話的で深い学びにつながる言語活動が展開できた。
- 相手に何を伝えたいのか、そのためにどのような表現を使えばよいのかを、自ら考えてコミュニケーションを図ろうとする姿勢が徐々に見られるようになってきた。
- 設定された場面において、自分の思いや考えを伝えるために、本時で学んだ語彙や表現に加え、既習内容のどの表現を使ったらよいかを思考・判断し、それらを活用して表現する力を、さらに高めていく必要がある。
- 語彙力の個人差が大きい場合、言語活動における効果的な学習の在り方や個に応じた支援の在り方について考え、実践していく必要がある。

道徳部会（泉小：小河 浩美、錦中：鈴木 未来）

1 研究方針

発達段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を、一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」「議論する道徳」の実現に向け、実践の視点を「自己を見つめる学習活動」、「多面的・多角的に考える学習活動」とし、学習過程の各段階において以下のようなテーマを設定した。

- (1) 導入「自我関与を促す教材提示」
- (2) 展開「考えを深めるための話し合い活動」
- (3) 終末「発達段階に応じた、気づき・芽生えに向けた活動」

2 実践内容

- (1) 小学校1年生「ええところ」
内容項目 A-(4) 個性の伸長
- (2) 小学校2年生「ありがとう、りょうたさん」
内容項目 A-(4) 個性の伸長
- (3) 中学校3年生「ニワトリ」
内容項目 D-(19) 生命の尊さ
- (4) 中学校1年生「不自然な独り言」
内容項目 B-(6) 思いやり、感謝

3 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- (1) 導入について
 - 教材文に関連する補助教材（原作の絵本や動画、新聞記事など）を準備することで本文の内容把握がしやすくなった。
 - 教材文を途中で区切ったり、内容を確認したりしながら範読することで、児童生徒が内容を捉えやすくなり、登場人物への自我関与がしやすくなった。
- (2) 展開について
 - 目指す児童生徒像を明確にすることで、価値にせまる話し合い活動が充実し、一人一人が考え・議論する授業となった。
 - 児童生徒から出てきたつぶやきを、さらに深めるための問い返しや、全体への共有の仕方を工夫していきたい。
- (3) 終末について
 - 家族や友だちがどのように自分を見ているかを知ること、新たな気づきを促すことができた。